

# チョウの眼から見る

## 米軍北部訓練場・同返還地の調査経験に即して

山本 真知子

### 1. はじめに

2021年7月、沖縄島北部の一部は貴重な固有種の生息地として評価され、世界自然遺産に登録された。だが同登録地は、ジャングル戦闘訓練センター（以下、通称・米軍北部訓練場と記す）に隣接し、その返還地を含んでいる。森に生息する生きものたちは、軍事基地ととなりあわせの環境に置かれ、日夜米軍機の飛行による騒音にさらされるだけでなく、棲み処が基地の存在および軍隊の訓練によって汚染され破壊されるなど、いのちにかかわる深刻な基地公害の被害に遭いつづけてきた。しかも近年、2016年12月に部分返還された北部訓練場跡地からは、米軍のものと思われる廃棄物が大量に発見されている。政府は翌年12月までに汚染物質の撤去など「支障除去」を完了したとしてきたが、かけ離れた実態がそこにはある。本稿でとりあげるのは、その「やんばる（山原）」と呼ばれる沖縄島北部の森に生息するチョウをはじめとした生きものたちの調査を行いながら、米軍の訓練状況や米軍廃棄物の調査を続けてきた、宮城秋乃さん（以下、秋乃さんと記す）というチョウ類研究者の挑戦の軌跡である。

秋乃さんは米軍北部訓練場のヘリパッド建設による動植物への影響や、北部訓練場跡地内の米軍廃棄物による環境汚染の実態などを明らかにしてきた。調査活動をつづける傍らでつづけてきたのは、軍事化に巻き込まれてしまった生きものたちをまもるために、米軍車両の前に立ちはだかつて進行を阻止したり、北部訓練場跡地で収集した米軍廃棄物を米軍に直接返却したりする「実力行使」だ。

この二つの活動の軸は、沖縄のマスコミと反戦平和運動から異なるかたちで受けとめられてきた。沖縄のマスコミは、昨今米軍廃棄物の問題や世界自然遺産の登録に絡めて、チョウ類研究者として活動するかの女の見解を取り上げ随時報道することを通して、かの女を沖縄の言論空間において唯一無二の存在として押し上げてきた。他方、反戦平和運動では非暴力的でない行動に出ることもあるかの女を厄介な人物として警戒してきた印象がある。そのいずれの立場も否定するつもりはない。だが両者とも、かの女がなぜ／どのようにチョウだけでなく他の生きものたち、さらには米軍の訓練や米軍廃棄物の調査をつづけてきたのか、なぜ阻止行動をしてきたのかという問いを封じてきたのではないかとすることが、ど

うしても引っかかってしまうのだ。そこでここでは、別ものとして切り離されたまま語られてきた調査活動と直接行動をつなぐ地点を探ってみたいと思う。

より具体的にいえば、秋乃さんがチョウをはじめとした生きものたちの視点から、どのように軍事化による影響をヒト社会に向けて警告しつつきてきたのかということに注目する。そこから、かの女の調査行為が、チョウや昆虫の眼を通して基地や軍隊による影響を発見していく過程において経験されてきたかもしれない可能性を検討していく。

さて、今回主題とする〈チョウの眼から基地問題を考える〉というアプローチだが、あらかじめ断っておきたいことがある。それはこれが、東南アジアを歩き知を深めていく過程を運動として実践してきた、思想家・鶴見良行の視点と方法論から着想を得ているということだ。わたしは秋乃さんの調査行為を追い、話を聞かせてもらうなかで、ヒト以外の生きものの視点から歴史を書き起こした鶴見の著書『ナマコの眼』(1990)に出逢い、かれがのこしてきた足跡をたどりはじめた。鶴見が東南アジアを歩きつづけてきた理由を一つ挙げるならば、それは多国籍企業が東南アジアに進出し、生産者と消費者がたがいに顔の見えない断絶した関係に留め置かれていく状況を変えようとしていたためである。かれは、消費する側——すなわち、搾取する側——が東南アジアの人びとを知り、自らの暮らしを見つめなおしていくところに希望を見出そうとしていた(鶴見、1986[1985]:

178)。鶴見のフィールドワークについては別稿に譲ることにするが、かれがナマコの歴史を書くということになにを込めていたのか、もう少したぐりよせておきたい。

東南アジアで干しナマコという加工食品に強い関心をもった鶴見は、朝鮮、ロシア沿海州、中国、北オーストラリア、日本など各地の海辺を歩き、ナマコについて史料を集め、人びとのあいだで継承されてきた知恵や技術を記録してきた。そうして「ナマコとの対話」が生まれる場に身を置くなかで、鶴見はナマコとともに生きてきたマイノリティーの人びとに出逢い、かの女／かれらが直面してきた差別の問題を浮き彫りにしたのである(1990: III, 144 - 145)。忘れてはならないのは、かれがあくまでもナマコの眼から見た世界を書き起こそうとしていたことだ——念のため書き添えておけば、ナマコという生物は眼をもっていない。しかも、ナマコを調査すること自体、アカデミアのなかで決して歓迎されていたわけではなかった。かれがナマコを調査していると言ったときに、その正当性を疑問視する人びとは少なくなかったという。だがそうした「取るに足らない」、「醜い」存在としてさげすまれてきたナマコにも、「歴史を語る資格」があると考えたのが鶴見であり、ナマコに歴史を語らせるところから「ヒト族」を批判するという回路をひらいたのである(Ibid.: 492)。

その鶴見のナマコ学は継承され発展されつつある。鶴見の方法論が内包している「ナマコの抵抗」や「ナマコの連帯」の可能性はすでに発見されているし(鶴見・池澤:

2005)<sup>(1)</sup>、ナマコの保全や文化多様性の観点からも調査されている(赤嶺、2010)。その一方で、鶴見がそこに込めていたであろう運動論が十分にくみ取られてきたとは言いがたい。鶴見は、自己(人間)中心的な出来事の見方、語り方を根幹から問いなおし、変えていくことを迫っていた。自らを中心に据えて世界を理解することの限界を知ることは、だれの、なんの声に耳を傾げるのか、どこに身を置きながらことばを発していくのかという問いへひらかれている。そしてそれは、それまで無化されてきたひとやものの存在を見えるようにしたり、その声を聞こえるようにしたりするためのことばを生み出していく過程にもつながっていくはずだ。だとしたら、鶴見が試みたナマコの眼から見るということは、人間だけでなく、ほかの生きものたちとともに生き延びていくことができる未来をどうやってきりひらいていくか考える契機を生み出しうるのではないだろうか。

こうしたことを念頭に置いたうえで、本稿ではチョウの眼から見るということを、あくまでも秋乃さんがきりひらいてきた独自のアプローチとして用い、考えていくことにする。というのも、このチョウの眼から見るという方法に着目するようになった背景には、かの女の話聞いてきたわたし自身の経験、あるいは身体感覚が深く関係しているからだ。

北部訓練場返還地で米軍廃棄物の実態を見せてもらったときに、わたしはかの女がチョウや昆虫の視線から森を見ているのではないかと思いはじめた。かの女からこれ

まで経験してきたことを聞かせてもらうときにも、かの女の眼を通してチョウの眼に射抜かれるような、あるいはチョウの眼を通して考える感覚に引きずり込まれていくようなことがたびたびあった。チョウの視線を感じとったこれらの体験からは、つぎつぎに問いが生まれはじめた。秋乃さんはどのようにしてチョウの眼をもつようになったのか、チョウの眼からなにを見ているのか、チョウの眼から見るとはどのようなことを意味するのか。チョウの眼をもっていないとなにが見えないのか、あるいはわからないのか。

かの女との交流を通して、わたしはチョウの眼から世界を見るための出発点に立った。本稿には、秋乃さんからお話を聞かせてもらうなかで、どのようにチョウの眼から見るために必要なことばを鍛えてきたのかを記録していく。それは、かの女の経験してきたことを掘り起こしていくなかで、チョウの眼から見る－見られるという関係性を考え、その可能性をおしひろげようと試みる過程でもある。

まず、秋乃さんによって担われてきた沖縄北部地域での調査の過程を概観し、つぎにチョウの眼を通してどのように軍事化と脱軍事化を見てきたのかを追っていくことにしよう。

## 2. 宮城秋乃さんの調査の軌跡

宮城秋乃さん(1978年生まれ、浜比嘉島出身)は、チョウ類の研究を専門として、やんばるの森に棲息する生きものたちを調査する研究者で、「アキノ隊員」という呼

び名でも広く知られている。本節では、主に2020年2月1日、3月31日、9月26日に行った秋乃さんへの聞きとりと、かの女ブログ『アキノ隊員の鱗翅体験』を通して、調査活動の軌跡をたどってみることにする。

2011年9月、秋乃さんは希少なリュウキュウウラボシシジミ（沖縄固有亜種、準絶滅危惧種）が東村高江で大量に生息していることを観察し、さらに2014年には国頭郡安波でも多数確認した。同種は、「清流の流れる自然度の高い場所に生息し、分布は局所的で、その生息地でも個体数が少ないことから、両地域は「国内最多の発生地」であることがわかってきた（宮城、2017：26）。高江と安波の森に新しいヘリパッドが建設される計画があることは知っていたが、地元の人たちの反対を押し切って施工されるとは思っていなかったという。しかし、2011年11月にそれまで中断されていたヘリパッド建設が再開され、リュウキュウウラボシシジミがいるとわかっていた秋乃さんは、「とにかく動かないと」とリュウキュウウラボシシジミについてアピールしはじめた<sup>(2)</sup>。

しかし、いくらゲート前での阻止行動に出ても、ヘリパッド建設は止まらない。そんなときに、高江に棲息するリュウキュウウラボシシジミのことが、地元紙の一面で取り上げられた。秋乃さんは、自分に「できることは、ここの虫を調査することだ」と確信し、チョウのことを調査するだけでなく、やんばるの森のどこに「どんな貴重な虫がいるのか」調べるようになった。

森を歩き調査を進めるなかで、奄美大島で4個体しか発見されていなかったケナシツヤヒラタゴミムシや、同島で数個体確認されているニセキンモリヒラタゴミムシ、宮古島で3個体しか見つかっていないミヤコホソコバラオオハナノミなど、希少性の高い種が生息する場所であることが明らかになってきた（宮城、2017：26 - 27）。

ヘリパッドの工事が再々開された2016年には、ヘリパッド建設予定地N1地区につづく林道（F4ルート）が県道側から敷かれるなか、リュウキュウウラナミジャノメ（沖縄固有種、準絶滅危惧種）というチョウの多産地であることや、特定のホルストガエル（沖縄固有種、絶滅危惧種）の棲み処となっていることを確認し、林道の破壊が「かぞえきれないほどの生物を殺すこと」になると警鐘を鳴らした<sup>(3)</sup>。この事実は防衛省にも環境省にも伝えられたが、林道建設が止まることはなかった。9月中旬に成虫に羽化することが多いリュウキュウウラナミジャノメは、幼虫かさなぎの状態で見られた木々と一緒に刈られた可能性が高く、ホルストガエルは移動できたとしても、移動先で生き延びることができたかどうか定かでないという<sup>(4)</sup>。

工事によって木々が切り倒され、森が切りひらかれていく状況下で、秋乃さんが目を留めたのは、既述のような希少ゆえに価値づけられ注目されている種だけではない。

希少種だからそれら（＝リュウキュウウラナミジャノメとホルストガエル）の名前出したただけであって（中略）、

普通の生きものもたくさんあって、それも追いやられるか、もしくは殺されるかして。それをわたしはもう見てしまったわけさ、目の前で。<sup>(5)</sup>

しかしながら、こうした生きものたちの生死にかかわる現場に居合わせていながら、沖縄防衛局の職員や警察は「同じものを見て」いたわけではなかったことが次第に明らかになってくる。それは、秋乃さんにとって「この森を見れば、壊そうなんて思わないはずとっていた」のが、そうではなかったことに気づかされる瞬間とかさなった<sup>(6)</sup>。かの女は、工事現場で作業員や警察にこう問いかけていたという。

「あなたたちは今日、何匹殺したか言えますか」

「あんたがいま殺した動物たちの名前、全部言えますか」<sup>(7)</sup>

答えはなかった。怒りの矛先は、実際に生きものの棲み処を奪う行為に手をくだしている作業員だけでなく、日本政府や沖縄防衛局にも向かった。「見えないところで指示を出して、(中略)直接見ないでいのちを奪う」という、「卑怯」なやり方に納得できなかったからだ。こうして、かの女は知らないうちにいのちを奪っている、奪えてしまうということのうちに、「戦争」の気配を嗅ぎとりはじめる。

自分が名前も知らない、何匹いるかもわからない生きものを、殺してるわけさ。逆にあたしそれって、すごい恐ろ

しいことじゃないかと思うわけ。いま、一人殺した二人殺したって、わかるんじゃないかって、ほんとに自分がどれだけ殺してるかわからない状態で殺してるのに、しかもだれを殺してるかもわからないのに、罪悪感も責任感もない。これが戦争じゃなくてなんなんだって思うわけさ。(中略)大量虐殺なのに、それが世間では大量虐殺は起こっていないかのように見過ごされてて、どこにも「大量虐殺」っていうことばが出てこないわけ。<sup>(8)</sup>

森に棲む生きものたちが「大量虐殺」されていく、まさに一刻を争うときにも、秋乃さんは、ヘリパッドの工事現場に足を運びつづけた。危機にさらされたいのちをまもるために、そこで身を挺して工事を阻止し、作業員や警察に声をかけつづけたのである。

しかしながら、2016年12月に6基すべてのヘリパッドは完成し、北部訓練場の過半の土地の返還式が開かれた。防衛省はその後、実質8か月で返還地の支障除去を終え、翌年12月に地権者に土地を引き渡したものの、原状回復しているわけではない。その引き渡しから2日経ってから、秋乃さんは北部訓練場の返還地に米軍が捨てたと思われるゴミを発見し、その後も返還地の汚染状況を調査しつづけてきた<sup>(9)</sup>。すでに、秋乃さんによって確認されている廃棄物を挙げておく。

数種の使用済み照明弾多数、使用済みスモークグレネード(煙幕手榴弾)多

数、使用済み発炎筒数発、機関銃用の箱型弾倉多数、ケミカルライト多数、空の弾薬箱多数、乾電池多数、液体の入った点滴袋、海兵隊マークの描かれたTシャツ数枚、ブーツ、靴下、認識票、カモフラージュネット、ゴーグル、ハンドライト、飯ごう、食事用トレイ、缶や瓶、ビニールのごみ袋、鉄筋の入ったコンクリートの瓦礫、地面に打たれた鉄の杭多数、タイヤ、オイルカン多数、有刺鉄線など（宮城、2019：91）

ほかにも、地中にはレーション（野戦食）の袋が埋まっていたり、FBJヘリパッド跡周辺地には、ヘリパッド造成用のライナープレート（大型鉄板）や土嚢、ゴムシートが多数地中に残置されていたりする。また、秋乃さんが米軍廃棄物を見つけた土壤からは、有害物質が次々と確認され、化学薬品による返還地の「見えない」汚染の実態も明らかになりつつある。これまで、2018年5月に国頭村安田の返還地でDDTやBHC類が発見され、2019年3月に米軍のドラム缶発見地点でPCB（ポリ塩化ビフェニール）も出てきた（琉球新報、2018年5月19日；琉球新報2019年3月9日）。さらに2020年12月、国頭村安田の返還地では、放射性物質コバルト60を含有する電子管19個が発見された（琉球新報2020年12月16日；沖縄タイムス2020年12月16日）<sup>(10)</sup>。

米軍廃棄物の問題は、廃棄物の存在や、それによる影響に留まらず、その回収に絡んだ法的問題にも及ぶ。秋乃さんは、返還地で未使用不発の弾薬類を見つけるたびに、沖縄県警に通報してきたが、2019年

10月以降、通報後に回収されていた弾薬が通報しても回収されなくなったという<sup>(11)</sup>。県警の説明によると、発見者から通報を受けた県警が、土地管理者の沖縄森林管理署に連絡し、沖縄防衛局が回収を行うことになったそうだが、森林管理署や沖縄防衛局は秋乃さんに場所の確認等問い合わせてきたことはなく、不発弾の回収もなされていない。

県警が返還地で不発弾を回収しないのは、「跡地利用特措法第2章」が適用されるためと説明しているが、同章は軍用地を引き渡す前に支障除去することを定めているに過ぎない。県警が「米軍の尻拭いをしなくなった」ため、不発弾は大量に残置されたままになっている（宮城、2020：115－116）。しかし回収されなかったとしても、「110番」に通報すれば「確実に記録される」。それならばと、秋乃さんは「110番」しつづけるのである。

だが、生きものたちの身が危険にさらされた状況にあることがつぎつぎに明らかになる一方で、人びとの関心が高まることはなかった。かの女の心を砕いたのは、この「反応がない」という状況、すなわち人びとの無関心さだった。

関心が寄せられないのは、環境汚染をもたらしてきた軍事訓練も同じだ。これまで長時間張り込むなど地道な記録活動をつづけるなかで、米軍機が北部訓練場返還地のFBJヘリパッド跡に着陸したり、沖縄本島全域に供給される重要な水源の一つであるフンガー湖（普久川ダムのダム湖）や安波ダム上空を低空で旋回したりしていたこと

が突き止められてきた<sup>(12)</sup>。だが、これらは「自らの飲み水の上空を米軍機が低空で飛ぶ」危険な訓練であるにもかかわらず、人びとは見向きもしなかった。どれだけ発信しても伝わらないことから、今後はダム上空で飛行訓練があったとしても「人への害」には言及しないことにしたとブログで通告した。だが、そこには「森の生きものたちに被害を与えることについては絶対に許しません」という、但し書きが付されている<sup>(13)</sup>。かの女は、森に棲む生きものたちのためだけに調査と発信をつづけるようになった。

ここで眼を留めたいのは、秋乃さんがこの反応がないという状況から感じとっているのは、沖縄に対する「差別」だということだ。

ここで阻止できないんだったら、反応しないんだったら、もう本土で起こっても反応するなって思っちゃうわけ。それこそ沖縄差別だって。でも結局、沖縄は当たり前、本土は当たり前じゃないってなっている。<sup>(14)</sup>

「本土だとすごいニュースになっている」のに、沖縄では「ニュースにならない」し、「みんなも反応しない」。かの女はこの状況を「差別」と呼び、批判しているのである。

秋乃さんは、この当たり前ではない待遇を、米軍基地ゲート前の民間警備員による監視行動を通して身をもって経験している。基地ゲート前を車で通過すると、警備員が無線機で連絡をしたり、メモを取ったりしていることが、2019年10月8日以降

繰り返し確認されている。ゲートを通過したすべての車両が記録・報告の対象となっているわけではないため、かの女個人を狙ったものと思われる。赤嶺政賢衆議院議員が「人権侵害」にあたるとして防衛省に3回交渉したところ、同省職員は「警備のために通過する人を記録・報告することがある」と認めた<sup>(15)</sup>。だがその後も、ゲート前を通過するだけで監視の目にさらされる状況は変わらず、「気持ち悪さや怖さ」を抱えたまま調査がつづけられている。

調査が継続されるなかで、新たな発見もあった。2020年8月に、1993年に返還された北部訓練場返還地から大量の米軍廃棄物が見つかったのである。大量の瓶類【写真1】や弾薬類、野戦食の袋のほか、同年10月16日には未使用・不発を含む銃弾



写真1 1993年に返還された北部訓練場返還地で発見された大量の瓶類。(2020年9月26日、筆者撮影)。

170発も確認された<sup>(16)</sup>。

そして、この銃弾が発見された日を境に、秋乃さんは弾薬類を除いた米軍廃棄物を袋に詰めて米軍に「返そう」と、継続的に北部訓練場メインゲート前まで持っていきはじめた<sup>(17)</sup>。そこには、こんな思いがある。

返還後27年間も人に知られず森を汚染してきた廃棄物を、ほんの少しずつだけでも除去して、早くきれいな森を生きものたちに返してあげたい<sup>(18)</sup>

### 3. 「実力行使」と「愛」について

秋乃さんがチョウをはじめとした森の生きものを調査・研究しながら、返還地や訓練の実態を調べてきた軌跡から浮かび上がってくるのは、チョウの傍らに留まり、チョウの眼から外界を見るという作法が、米軍基地と軍隊の存在・訓練に対しても見られるということである。文字通りからだを張って生きものたちのいのちをまもろうと前線に立ちつづけてきたかの女の言動には、なにが込められているのか。以下では、その直接行動の部分に焦点をあてて考えてみたい。

すでに述べたように、秋乃さんは、米軍や工事業者の車両を基地ゲート前で阻止したり、米軍廃棄物の返却活動にも積極的に取り組んだりしている。もう少しこれを具体的に説明すると、前者はゲート前で記録用のビデオカメラをもって車両の前に立ち、はだかり基地への出入りを止めることを指す。これは、昼夜を問わず、米軍車両やヘリの音など異変を察知すれば、寝巻きのま

までも車に飛び乗って現場に直行するという機動性を伴っている。また後者は、返還地で回収した米軍廃棄物をビニールの袋に入れて、米軍の敷地との境界線であるイエローラインの（米軍から見て）内側に置いて、「返却する」という新たな試みにあたる。米軍は、日米地位協定では米軍廃棄物を除去する責任を負わないとされているが、かの女によって返却された廃棄物が入ったごみ袋は、米軍によって引き取られるという異例の対応も確認されているという<sup>(19)</sup>。その一方で、県警からは「何かしらの法に触れる可能性があるので、今後は同じことをやらないように」と、たびたび警告されてきた<sup>(20)</sup>。

このように短く記しただけでも、秋乃さんがやってきたことが、違法行為か否かのギリギリのラインで展開される国家との攻防戦であることがわかるだろう。かの女はそれを「実力行使で止める」行為と呼び、「非暴力」による「非実力行使」と明確に区別して実践してきた。だが、ここでかの女の実力行使を伴う行為・振る舞いを「暴力」というカテゴリーとしてくくって批判の的にしたならば、それが何を意味しているのかをとりこぼしてしまう。秋乃さんは、なぜ、なんのために自らの身を挺して工事や訓練を阻止してきたのだろうか。

2020年3月26日、秋乃さんはブログにこう綴っていた。

75年経った今も沖縄には米軍が残り、日本軍にも攻め続けられ、海と森と命と生活が破壊されている。沖縄の一部の人にも非国民と言われないようにそれ



に加担する。  
 批判や抗議だけで止まらないことはもうみんな気付いているじゃないか。  
 非暴力とは非実力行使ではない。沖縄の人びとはずっと座り込んできた。これ以上、沖縄の人びとに求めないで。  
 本土の人びとはどれだけの実力行使をしているのか？  
 口先だけで平和を唱えるのはもうやめてくれ。<sup>(21)</sup>

この記事は、慶良間諸島に米軍が上陸した日（1945年3月26日）に合わせて投稿されたものである。

秋乃さんの自宅にうかがったときに、わたしはこの記事について尋ねた。かの女は、3月後半になると、「沖縄戦、米軍上陸を思い出して、米軍がやって来たぞー、けどまだいるじゃないか、っていう気持ちになるわけさーね」といった<sup>(22)</sup>。このことばの背景には、沖縄で機動隊や工事業者をはじめ、「日本軍側に加担する」人たちが少なくないという状況がある。

冷静になって考えたら、いまここに米軍があること許してしまったら、あとあと自分の子どもたちが痛い目に遭うっていうことがわかるはずだわけさ。（中略）けど、そこを想像せず、いま自分の状態が安全である状態をつくるっていうのが、もしくはお金が手に入る状態をつくるっていうのが……。結局は過去の沖縄戦で苦しい思いをして死んでいったひと、そして未来に、苦しむかもしれない子どもたち

のことは、もうなにも考えてないわけさーね。<sup>(23)</sup>

だが、敗戦後70年以上のあいだ、沖縄のなかで分断させられ対立がつづいてきたことを踏まえたうえで、秋乃さんが強調したのは、座り込みをはじめとする実力行使による運動が脈々と受け継がれてきたことであった。そして、本土の人たちは「実力行使をしているのか」という問いに立ち返り、要請行動や抗議行動、裁判など、「いままでずーっとやってきて、止まらない」ことはわかっているはずにもかかわらず、自らの行動を変えようとしない人びとについて、こう語った。

もうなんか、あたしからしたら沖縄の人たちはここまでやっているのに、本土の人たちはそれだけしかやらないの？ちょっと、ごめんね、本土の人の前で。やってる人もいるのはわかってるけど、大部分の人の話よ。本土の人たちは、それ以上のことやらないの？沖縄の人に任せつづけるの？（中略）今まで批判とか抗議とかで止まらないんだったら実力行使しかないのに、しかも、それにみんな気づいているはずなのに、沖縄のひとだけに任せるなよ、と思って。<sup>(24)</sup>

かの女は、「本土の人たち」が「人に迷惑をかけないデモ」や裁判を起こすだけで満足し、「平和的に怒るだけ」でいることに苛立ちを募らせていた。その「本土の人たち」のなかには、この話の聞き手であるわたしも恐らく含まれていたのだろう。「ご

めんね、本土の人の前で」と声を掛けてはもらったが、かの女は聞き手がいくら自らの活動を支持し寄り添おうと振舞っていたとしても、話を聞くということが具体的な行動に結びつかなければ、森の生きものたちにとってはむしろ有難迷惑だと、気づかせようとしていたようにも思う。

その日々の阻止行動の様子は、森の生きものたちの観察記録とともにブログやSNSで発信され、地元紙を中心に新聞でも取り上げられてきた。記事を目にした人たちからは、「気をつけてね」とか、「機動隊とか作業員にも家族がいるんだよ」とかいわれたこともあるという。だが、そうした「悪気のない」ことばを聞くたびに、疑問に思ってきた。

もっと想像力を豊かにすれば、たとえば強硬な手段に出ても止めようとするのが、悪じゃないってというのがわかるはずなのに、「暴力的」とか、「実力行使はあんまりよくないんじゃないか」、みたいなこと言う人もいるし。もうちょっと想像してみよう、あたしたちが「非暴力」とか言って、平和ぶってるあいだに死んでるいのちがあるよと。これが人間のせいで死んでるいのちがあるわけさ。たとえば、どっかの宇宙人がどうこうとかじゃないわけ。そしたら人間が責任もって止めないといけないじゃん。それなのに、よそで誰かがやってることかのように、もしくは自分が人間ではないかのように、「あの人たちにも家族があるからしょうがないのよ」って。でも、あた

したちはこの森を壊してる人間っていう、側にいるわけさ。したら、全部あたしたちの責任なわけ。だから、あたしたちのなかでほんとは止めないといけないのに、うーん、なんかもう外からそれを見てるかのように言う人がいてさ、「あー、動物たちのこと想像してないんだなー」って思っちゃうわけ、あたしは。つねに動物たちの視点でいるから。<sup>(25)</sup>

かの女は、「非暴力」による行動を力としてたたかう人たちが、異なる種のいのちをいかに不平等に扱ってきたか、そのことはいかに鈍感になっているか、ということをも痛烈に批判する。

「動物たちの視点」から見れば、ここで指摘されている「想像力」の欠如は、実に具体的な喫緊の問題として迫ってくる。それに気づいたのは、わたしが「それだけ動物のことを考えていたら、気持ちまで感じるようになるんじゃないですか」と尋ねたときだ。くりかえしになる部分もあるが、ヘリパッド建設時に行われた森林伐採によって、ホルストガエルの棲み処やリュウキュウウラナミジャノメの多産地とわかっていた場所が破壊され、そこに棲息していた生きものたちが生き残れたのか不明だということ。すぐ傍らにいる防衛局や警察が、「同じものを見てるのに見えてない」ことを知って驚いたこと、「罪悪感ももたず、いのちを殺してる」状況に「戦争」を感じ取ったことを、かの女は応答として語った。

つまり秋乃さんは、動物の気持ちがわかるといったのではなく、それぞれの動物た

ちが置かれた状況を語りだしたのだ。そのことばからは、かの女の日頃の調査に基づいた現実的な問題に貼りついた感覚がにじみ出ているだろう——この感覚こそが、チョウの眼から見た世界として差し出されたものなのかもしれない。

秋乃さんが、自らの活動を知った本土の人たちから「気をつけてねー」とわれて心配されるたびに落胆しつづけてきたのは、動物たちの視点でともに考え行動していくための出発点に立つことさえも困難であることを思い知らされるから、つまり、沖縄と本土のあいだに横たわる圧倒的な距離を見せつけられてきたからなのかもしれない。かの女が求めているのは、「その行動は自分がやるから、こっちでやるから」という声であり、具体的な想像力から起こされる行動にほかならないのである<sup>(26)</sup>。

興味深いのは、想像するためには知識をより多く蓄えるよりも、「感じること」や「想像すること」そのものが重要だと、秋乃さんが強調していることだ。かの女は、レイチェル・カーソンが「「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない」といったことを引いて、つぎのように熱く語っている (Carson, 1965=1996: 24)。

好きだったら想像して感じるわけさ。だけど、ただ「おもしろーい」とかって好奇心だけだったら、知るだけで満足しちゃうわけ。なんかね、ひとがひとを好きになったらさ、この人のいろんなこと想像するじゃん、それと同じことが動物に対してできないわけよ。うーん、それって愛なのって、思っ

しまう。<sup>(27)</sup>

想像することを支えていたのは、ほかならぬ「愛」だった。生きものたちを愛しているからこそ、かの女は調査し、実力行使してきたのである。

ブログで不定期に調査活動の資金を募るときにも、「愛」ということばは出てくる。

米軍基地に振り回される自然と生き物たちを救うため、引き続き資金が必要です。

ワタシには生き物への愛も覚悟も技術も体力も備わっています。足りないのはお金だけです。

(中略)

私の活動を応援していただける方はカンパをどうぞよろしくお願い致します。<sup>(28)</sup>

ここでふと疑問に思うのは、生きものたちへの「愛」が、なぜくりかえし言及されなければならなかったのかということだ。カンパを募る際に「愛」ということばを入れたわけを尋ねると、かの女は「似非愛が多すぎるから、あえて書いた」といった。かの女が自らと区別しようとしていたのは、「生物研究者」あるいは「生物愛好家」として名乗りながらも、生きものたちが置かれている危機的な状況に目を向けようとしない人たちの存在であった。

研究者っぽくモノ言うんだけど、それよりも大きな自然破壊とか日本政府に対して、研究者は黙りこくってしまう

わけさ。もう生きもののSOSが聞こえないように、耳ふさいで。あんなの愛でもなんでもないさ。ただの美味しいとこどりさーね。生物のおもしろいところと、きれいなところとかわいいところが好きなだけ。<sup>(29)</sup>

こういう「おいしいところが好き」な生物研究者や愛好家のなかには、たとえば「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境監視等委員会」のメンバーも含まれている。かの女は、その委員会の専門家が、「辺野古に土砂を運んだら外来種が入る」ことを言わないことに憤りを隠さない。さらに、そうした専門家のSNSでの発言をシェアし、「持ち上げ」る一方で、批判してこなかった不特定多数の人たちの存在も問題として指摘する。

「愛しているはずの対象が助けてくれてなくなったときには、何も言わない、逃げる」。かの女は、「それって、愛なの？」と問いかけつつけているのである。

#### 4. おわりに：チョウの眼から見る

秋乃さんは、米軍基地公害の被害に遭いつづけてきた生きものたちの傍らに身を置き、貼りつくようにして観察しつづけるなかで声なき声を聞こえるようにしてきた。その調査活動を通して、チョウの眼を通して世界を見るということは、かの女の身体作法の一部となっただけでなく、米軍北部訓練場の返還地を世界自然遺産の一部として登録し、その土地に刻み込まれた記憶を上書きしようとする昨今の言説に対抗

する力にもなりつつある。

だが忘れてはならないのは、こうした調査に並行して、かの女が眼の前に広がる現状を「実力行使」によって変えようとしつづけてきたということだろう。くりかえすようだが、かの女の調査活動は広く注目を集めるようになった一方で、直接行動は過激なものとして静観されることが少くない。

わたしもその行動をわかったつもりになっていただけで、かの女がそこに賭ける思いを理解していたわけではなかった。だが話を聞いていくなかで、基地ゲート前に身を置きアピールする姿は、別ものとして立ちあらわれはじめた——すなわち、チョウへの愛を体現する行為だったかもしれない可能性が浮かび上がってきたのである。そうしてわたしは聞くという行為を通して、自らの身体がかの女の感情にのっとられ、気づいたときにはチョウの視点から世界を見つめはじめていたように思う。

冒頭で鶴見良行が「ナマコの眼」を通して歴史を記述しようとしたことに触れたが、かれ自身この「ナマコの身になって考える」という方法が、学問では禁じられていることを十分自覚していた。だが、それでもナマコに身を委ねて歴史を語ろうとしたのは、それがかれにとって「現実に行きづまったところから生まれた」表現であり、そこを起点として広がっていく知の領域を信じていたからではないだろうか（鶴見、1995：162 - 164）。——この広がりを生む契機となる知を生み出すための挑戦こそが、鶴見にとっての運動であったのかも

しれない。そしてそれは、秋乃さんが調査とアピール活動を通して積みかさねてきた経験に抱え込まれたものでもあるだろう。

秋乃さんが調査のためによく訪れる東村高江では、北部訓練場に新設されたヘリパッドの本格的な運用がはじまり、米軍は毎日のように超低空を飛行する危険な訓練をつづけている。地元の住民たちは、政治によって分断や対立がたびたびもちこまれてきたためか、基地ととなりあわせの日常のなかで感じる怖さや怒りを表現することが難しい。近所のひとに「最近、うるさいよね」という一言を、米軍の飛行訓練に対する怒りや苛立ちとして、あるいはいまできる精一杯の意思表示として受け止められるかどうかのほうが重要なものかもしれない。だが、本土の人たちの多くは世界自然遺産としてのやんばるに興味をもったとしても、そこで米軍が訓練をしていたり、基地があることによって自然環境が汚染されたりしていることには無関心だろう。現状を直視させないための土壌が、政府やマスコミによって築きあげられてきたことは十分に批判されねばならないが、だからといってそれに寄り添い、世界自然遺産登録を手放しで歓迎する人びとの群れを看過することもできない。他方、脱軍事化にむけて動き出している人たちであっても、自分たちのたたかい方に安住してしまうことは少なくない。

わたしたちは、すでに行きづまっているのではないか。ここからはじめるには、異なる種とのあいだにどんな出逢いを求め、行動していくかということが、決定的に重

要になるだろう。チョウの身になって考えるということは、その入り口に立つことになるにちがいない。

#### 参考文献

- 赤嶺淳 (2010) 『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』 新泉社。
- 鶴見俊輔・池澤夏樹他 (2005) 『歩く学問ナマコの学問』 コモンズ。
- 鶴見良行 (1985) 「アジアで日本は何をしているか」 (1986, 『アジアの歩きかた』 筑摩書房; 初出『学院ニュース増刊号』9月): 178。
- 鶴見良行 (1990) 『ナマコの眼』 筑摩書房。
- 鶴見良行 (1995) 『東南アジアを知る』 岩波書店。
- 宮城秋乃 (2017) 「やんばるの動物と生物多様性」——高江・安波で発見した希少動物と、ヘリパッド建設が動物に与えた被害の具体例『日本の科学者』第52巻4号: 24 - 29。
- 宮城秋乃 (2019) 「米軍北部訓練場返還地に残された米軍廃棄物から見えてきたこと」『議会と自治体』254巻: 89 - 93。
- 宮城秋乃 (2021) 「汚された世界遺産候補地——北部訓練場返還地」新垣毅・稲嶺進他著『これが民主主義か? ——辺野古新吉に“NO”の理由』 影書房: 101 - 124。
- Carson, Rachel (1965) *The Sense of Wonder*, New York: Harpercollins (= 1996, 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社)。

#### 注

- (1) たとえば、『ナマコの眼』を拡張する議論は、2005年に鶴見良行文庫の開設に伴いひらかれたシンポジウム「アジアと日本と、市民社会のゆくえ」で展開され、『歩く学問ナマコの学問』(2005)に収められている。
- (2) 宮城秋乃さんへのインタビュー (2020年2月1日東村高江にて実施) より。
- (3) 『アキノ隊員の鱗翅体験』「N1林道を潰すとリュウキュウウラナミジャノメとホルストガエルの生息地を直接破壊します。」(2016年8月15日) <https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e8910630.html> (最終閲覧日: 2021年11月16日)。
- (4) 宮城秋乃さんへのインタビュー (2020年3月31

- 日東村高江にて実施)より。
- (5) Ibid.
- (6) Ibid.
- (7) Ibid.
- (8) Ibid.
- (9) 2018年1月21日にブログ『アキノ隊員の鱗翅体験』に投稿された記事に、琉球新聞の記者と北部訓練場返還地を歩き、未使用の訓練弾を見つけたことが記されている。同日、琉球新報は「返還地に米軍廃棄物」の見出しで、この事実を報じた。同ブログによると、同訓練弾が発見されたのは2017年12月27日とされており、秋乃さんによる調査は、それ以降継続されていることになる。アキノ隊員(2018)「北部訓練場返還地で訓練弾含む米軍廃棄物を確認(2018年1月、国頭村安田)」(1月21日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/d2018-01.html>。『琉球新報』(2018)「返還地に米軍廃棄物 北部訓練場 未使用段、プロペラも」(1月21日)。
- (10) アキノ隊員(2020)「北部訓練場返還地から見つかったコバルト60を地元2紙が報道。(2020年12月16日)」(2020年12月16日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11768859.html>。
- (11) 宮城秋乃さんへのインタビュー(2020年2月1日東村高江にて実施)より。
- (12) 『アキノ隊員の鱗翅体験』から、以下の記事を参照した。「北部訓練場返還地に米軍ヘリ着陸。米軍は謝って着陸と回答。(2019年9月4日、5日)」(2019年9月6日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11253118.html>、「CH53ヘリ2機がフンガー湖上を低空で通過。(2020年1月23日、国頭村安田)」(2020年1月24日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11419512.html>、「CH53Eヘリが普久川ダム上空を旋回しLZ4ヘリパッドで離着陸訓練。(2020年3月24日、国頭村安田)」(2020年3月24日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11488284.html>(最終閲覧日:2021年11月16日)。
- (13) アキノ隊員(2020)「CH53Eヘリが普久川ダム上空を旋回しLZ4ヘリパッドで離着陸訓練。(2020年3月24日、国頭村安田)」(3月24日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11488284.html>(最終閲覧日:2021年12月28日)。
- (14) 宮城秋乃さんへのインタビュー(2020年2月1日東村高江にて実施)より。
- (15) アキノ隊員(2020)「沖縄防衛局に私的行為を監視されていました。赤旗に掲載されました。(2019年~2020年9月)」(9月19日)『アキノ隊員の鱗翅体験』[akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/d2020-02\\_2.html](https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/d2020-02_2.html)(最終閲覧日:2021年11月16日)。
- (16) アキノ隊員(2020)「北部訓練場1993年返還地で空砲170発発見、県警が回収。琉球新報が報道。(2020年10月4日~17日、東村高江)」(10月17日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11708919.html>(最終閲覧日:2021年12月28日)。
- (17) 『アキノ隊員の鱗翅体験』によれば、秋乃さんは、2020年10月16日から2か月間ですでに18・21・31日・11月3日の計5回、米軍に米軍廃棄物を返却しに行っている(以下参照)。その後も、米軍廃棄物を基地ゲート前に返却しに行く活動は継続している。「米軍廃棄物をゴミ袋一袋分、米軍に返してきました。(2020年10月16日、東村高江)」(2020年10月16日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11708397.html>、「米軍に米軍廃棄物をゴミ袋7袋分引き取らせました。(2020年10月28日、北部訓練場)」(2020年10月19日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11710603.html>、「米軍廃棄物を米軍に1袋分返して来ました。(2020年10月21日~22日、北部訓練場)」(2020年10月22日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11713801.html>、「米軍廃棄物をゴミ袋3袋分米軍に返してきました。(2020年10月31日、東村高江)」(2020年10月31日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11723300.html>、「米軍廃棄物をゴミ袋6袋分、米軍に返しにいきました。」(2020年11月2日午前2時過ぎ、北部訓練場)」(2020年11月3日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11725961.html>。「米軍廃棄物を米軍に返しにいきました。(2021年1月28日、北部訓練場)」(2021年1月28日)<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11810307.html>、「北部訓練場7時間封鎖。コバルト60使用電子管を米軍が引き取りました。(2020

年12月18日)」(2020年12月19日) <https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11772914.html>  
(最終閲覧日:2021年12月28日)。

(18) アキノ隊員(2020)「米軍廃棄物を米軍に1袋分返して来ました。(2020年10月21日~22日、北部訓練場)」(10月22日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11713801.html> (最終閲覧日:2021年11月16日)。

(19) アキノ隊員(2020)「米軍に米軍廃棄物をゴミ袋7袋分引き取らせました。(2020年10月28日、北部訓練場)」(10月19日)『アキノ隊員の鱗翅体験』<https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11710603.html> (最終閲覧日:2021年12月28日)。

(20) 2021年6月4日、秋乃さんは沖縄県警によって威力業務妨害の容疑で家宅捜索を受けたうえに、書類送検された。これに対する抗議署名は、2021年11月現在3,000筆を越えている。さらに2021年12月28日、米軍基地ゲート前に米軍のものと思われる空き缶や空き瓶を散乱させて業務を妨害した罪に問われ、在宅起訴されている。

『琉球新報』(2021)「宮城さん書類送検「不当捜査」抗議署名3000筆超す 県警や地検に提出」(11月6日) <https://ryukyushimpo.jp/news/entry-1419366.html> (最終閲覧日:2021年11月16日)

(21) アキノ隊員(2020)「本土の人々はどれだけの実力行使をしているのか。」(3月26日) <https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e11489937.html> 『アキノ隊員の鱗翅体験』(最終閲覧日:2021年12月28日)。

(22) 宮城秋乃さんへのインタビュー(2020年3月31日東村高江にて実施)より。

(23) Ibid.

(24) Ibid.

(25) Ibid.

(26) Ibid.

(27) Ibid.

(28) アキノ隊員(2019)「高江・安波の生物調査や保護活動へのカンパのお礼とお願い」(3月9日) <https://akinotaiinnorinshitaiken.ti-da.net/e10987894.html> 『アキノ隊員の鱗翅体験』(最終閲覧日:2021年12月28日)。

(29) 宮城秋乃さんへのインタビュー(2020年3月31日)より。

(やまもと まちこ 同志社大学大学院博士後期課程)